「あのちょっと
お話があるんですけど」
一色いろは
生徒会長であり
奉仕部に出入りして
いる女の子だ。

「さ…最近雪乃先輩や結衣先輩とやたら親しいですよね…？」
「一体どんな関係ですか…？」
いろはは真剣なまなざしでこちらをにらみつけてきた。

「なんでそんなことを訊くんだ…？」
「そんなの決まってるじゃないですか…」
いろはは俺の返事を聞かずしゃがみこんだ。

「チンポに訊くんですよ♥」
はむ。
いろははもうすでに俺の催眠にはまっていた。

「それでは雪乃先輩や結衣先輩と
どういう関係なのか
実検させてもらいますね♥」
「ああ遠慮なく
味わってくれ」
ぢゅるぢゅる
いろはは
ためらわず
舌で愛撫してきた。

「はむ…れる…
ぢゅぅ♥やたら
くっさいチンポですね♥」
「これだけ臭うってことは
使ってないってことだし
もしかしたら白かも…」
ぢゅるぢゅるぢゅる
むわ…♥
ふー♥
ふー♥

「いろはちゃん
フェラチオじゃなくても
もっと別の方法で良かったんじゃ
ないの？」
「何いってるんですか
男性の本音は精液に
あるんですよ♥
しらないんですか？」
いろはへの催眠は
どんどん強まり、
深みに落ちていく。

「いいからさっさと射精してください♥溜めてるんでしょ♥」
ずぽ♡ずぽ♡
ずぽ♡
ずゅるるる
「そこまでいうならいろはちゃんちゃんと俺の精液受け止めてね」

「射精すぞっ!!」
どくんっ
どぴゅっ♥びゅく♥
びゅるんっ♥
どぷどぷどぷん♥♥
どぴゅっ♥
びゅるるる♥
どぴゅっ♥
どぴゅっ♥

「どういろはちゃん俺と奉仕部との関係がわかった？」
「うぅ…まだフェラだけではわかりませんね…♥これはもっと調べる必要がありそうです♥」
ビュ～ビュ～ビュ～
んくんくん

いつものヤリ部屋へと
いろはを連れ込み、
まぐわう。
処女喪失の痛みを
そのまま快楽に
催眠アプリで変換してやった。

「どうしたの
いろはちゃん
やけに反応が渋いけど」
ふっ♡
う♡
「思ってたよりも
あなたのチンポが
大きくてですね…♥」
ぐち
ぐち
ぐち
ぐち

「もっとちゃんと根元までいかないと」
ビラ
ビラ
やっ♡
はっ♡
「チンポのことはわからないよ！」
「ちょっと待っ…♥待ってください♥」
ぐちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ぐちゅ

「奥に行ってるのわかる？
いろはちゃん？」
ビク
ビク
は♡
あ♡
は♡
「やだ♥
まってください♥
こんなの知らない♥♥」
ぐちゅっ
ぐちゅ
ずちゅ♡
ずちゅ♡

俺はいろはの
快楽度をあげてやる。
いのはから
あきらかに余裕がなくなった。
ぐぽ♥
ぐぽ♥
ぐぽ♥
ぐぽ♥
ぐぽ♥
ぐぽ♥
ぐぽ♥

「あっ♥はっ♥やっ♥」
ビクッ
「とんじゃう♥とんじゃうからぁ♥」
「いろはちゃんの初めての初まんこ種付けいくよ！」

はぁ♡
ぎぃ♡
ぎぃぎぃぎぃ♡
ビクッ
ビクッ
ぴゅるるる♡
どしゅ♡

「種付けイキの反応が初々しくていいね」
はー♥
はー♥
はー♥
「はぁっ…♥あっ……♥温かいのまだ射精てる…♥」
放心したいろはを俺のものにすべく腰をしっかりつかんだ。
どくどく

「えっ……♥」
俺は
催眠アプリの
リミッターを
解除した…！

「あぐっ♥うぅっ♥
なに……これ……♥♥」
いろはの身体に
体験したしたことのない
快楽が駆け巡る
ぬちゃっ
ぐぷっ
ぐぷっ

「これが本当のセックスだっ！」
「あがっ♥はっ♥苦しい♥」
とめどない快楽がいろはの脳へと至る。
ガクッ
ガクッ
あッ
あッ
はっ
ずん
ずん
ずん
ずん
ぐぽぽ♥

「あっ♥やば♥
これ深いっ♥♥」
ガクッ
はっ♡
はっ♡
ガクッ
「それじゃあ
ラストスパートいくぞっ！」
ずん
ずん
ずん
ずん

「いろはちゃんって
結構野太いオホ声だねw」

「オラっ!!
マジイキさせてやるぞ
いろはっ!
天国に連れてってやるからなっ!!」
「イグゥっ♥イグっ♥
イグイグゥッ♥♥♥
あっ♥あぁあぁあぁぁ♥♥」
パンパンパンパン

ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビュルルル
ぶびびゲッ
容赦ない射精が少女の膣にうちつけられる。

「あっ…ふぅ…
こんなに射精したの
久々かも」
「やっぱり
初物まんこは
最高だな…」
ビク
ビク
びゅー
びゅー

ドアが開く。
雪乃「……！貴方一体何を……！」
結衣「いろはちゃん」
二人は驚愕した表情でこちらを凝視していた。

「4人で乱交するぞ
さっさと服を脱げ…！」
ビク
ビク
「はいっ！」
終